研究ノート

# ヘンリー・フィールディングの家族観

澤　田　孝　史

東京国際大学論叢　人文・社会学研究　第3号　抜刷
2018年（平成30年）3月20日

研究ノート

# ヘンリー・フィールディングの家族観

澤　田　孝　史

# Henry Fielding's View of a Family

SAWADA, Takashi

Abstract

The purpose of this research note is to show how Henry Fielding thinks a family with children should be. In this research note, *Joseph Andrews* and *Jonathan Wild* are discussed. Fielding's ideal family is the Heartfree family of *Jonathan Wild*. Fielding writes some families in these two novels. In most of the families, male characters have problems. Henry Fielding is thought to spend his childhood in "a dysfunctional family." So, his ideal family is that parents love and protect their children, and prevent them from being anxious and nervous.

キーワード：ヘンリー・フィールディング，『ジョゼフ・アンドルーズ』，『ジョナサン・ワイルド』，家族，機能不全家族

## 目　次

はじめに
1. 『ジョゼフ・アンドルーズ』と『ジョナサン・ワイルド』について
2. フィールディングの家
3. 機能不全家族
おわりに

## はじめに

ヘンリー・フィールディング（Henry Fielding, 1707 ～ 1754）[1] が1742年2月22日に出版した『ジョ

ゼフ・アンドルーズ』(*Joseph Andrews*)[2] と，この約1年後の1743年4月7日に出版した『ジョナサン・ワイルド』(*Jonathan Wild*)[3] にはいくつもの家族が描かれている。本研究ノートは，それらの家族の中でも両親と子供から成る家族の描写を通して，親子関係や家族をフィールディングがこれら2作品の執筆当時どのように考えていたのかを考察したものである。

## 1.『ジョゼフ・アンドルーズ』と『ジョナサン・ワイルド』について

『ジョゼフ・アンドルーズ』のアダムズ牧師のベッドでの寝る位置は，

> アダムズはベッドを手探りで探し，寝具を静かにめくって，これはアダムズ夫人が長いあいだ彼に習慣づけてきた決まりである，そっと入り込み，体をベッドの隅の支柱の上に置いた，そこは，この善き女性がずっと彼に命じてきた場所であった。[4]

これはこの時期のフィールディングの家族観の一端を表す象徴的な箇所である。

『ジョゼフ・アンドルーズ』のウィルソンは，「私には最高の妻と三人のかわいい子供たちがおります。この子供たちには親としての心からの愛情を持っています」と妻と子供たちへの強い愛情を公言し，[5] 妻の判断力を重んじ，妻と子供たちと一緒にいることを最上の幸せと考えていることを口にする。[6] これらの言葉通り，ウィルソンの家族の様子は「アダムズとジョゼフとファニーは，ウィルソン夫妻の互いへの態度と，夫妻の子供たちへの態度，さらには子供たちの両親への従順で優しい態度に示される愛情に……魅せられた」というものであった。[7] ウィルソンの家では，親が子供たちを思いやり，子供たちが親を思いやっているのである。

ウィルソン夫人については結婚前からウィルソンは「申し分ない」(Perfections) ことを知っていた。[8] 困窮するウィルソンへの彼女の態度は慈善心に満ちていた。彼の求婚に対する彼女の態度からは，彼女に分別があり，常識をわきまえ，社会のことをよくわかっていることがうかがえる。ウィルソンは彼女の判断力と決断のおかげで幸せになれたので，それらを尊重している。この夫と妻の力関係は，対等というより夫が妻を上に置いているのである。アダムズはウィルソンの家族を「あれが黄金時代の人々が送っていた暮らし方だと断言」した。[9] しかし，これはフィールディングの考えではなく，アダムズの考えである。

フィールディングは『ジョナサン・ワイルド』のハートフリー一家を理想の家族として，最後の章で次のように描いている。

> ……ハートフリー，妻，二人の娘，娘婿と孫は，ハートフリーは孫を数人授かったのだ，一軒の家に全員が一緒に暮らし，そのうえお互い同士非常に仲がよく，愛情がこもっていたので，近所から「愛の家族」と呼ばれている。[10]

家族が互いを思いやりながら一つ屋根の下に暮らすことがフィールディングの理想であることが示されていると言える。

ハートフリーは奉公人フレンドリーに，自分の妻のことを「女性の中で最も優れた」と言い，[11] さらに「あぁフレンドリー，お前は妻の善良さをはっきりとわかってくれていたが，彼女の人格に何の欠点も無いことをよくわかっているのは私だけなのだよ」と語っているところから，[12] ハートフリーは妻を軽んじていないことが示される。

（拘禁されていた場所で）ハートフリーが妻を目にした瞬間，両目が突然の歓喜に輝いた。しかし，それはほんのわずかの時間であった。というのも，絶望がまたその両目を曇らせたからである。彼はすぐに妻と子供たちへの強い不安の言葉を口にするのを抑えられなかったのである。妻としては，夫の不安を減らそうと……最善を尽くした。[13]（かっこ内筆者）

ハートフリーは自分のことよりも妻と子供たちのことを気づかっているのである。これは妻も同様であった。ハートフリー夫人は，海上で嵐に遭った時「愛する夫と子供たちを残していく以外には死ぬことについて何の不安も持たなかった」のである。[14] 彼女は「夫と子供たちに自分の幸せを置く」女性である。[15] 常に二人は子供たちのことを考えていたのである。そして夫と妻が互いを思いやっていることが描かれている。つまり，ハートフリー夫妻は少なくとも対等であるということがわかる。また，二人が子供たちに愛情を注いでいることは次のところからもわかる。

……彼が幸せで仕事がうまくいっていた頃，彼と妻は一緒に話をするのが好きなのだが，彼らが子供たちの将来の財産用に貯めていた蓄えの話題は，その中でも最も楽しい話題の一つであったのだ。[16]

ハートフリーは，拘禁されている家で自分と夜一緒に居たいと言う妻に，「彼は子供たちのことを思って，彼女の考えを認めなかった。彼は，子供たちをこの混乱している時に召使いに託すことには同意しなかった」のである。[17]

子供たちからハートフリーへの愛情は，ワイルドが「前日ハートフリーの子供たちが父親から泣きながら引き離されて連れて行かれるのを見た時，少し心が苦しくなった」ほどであった。[18] そして，子供たちは親のために精一杯戦うのである。

役人たちがこのあわれな男ハートフリーのところに来た時，彼らはその男が幼い子供たちと見苦しい様子で遊んでいるのに気づいた。彼の次女は彼の両膝の上にいて，長女は彼から少し離れたところでフレンドリーと遊んでいた。役人のうちの巡査は，とても好人物なのだが，職務については見事なくらい厳格で，ハートフリーに自分の任務を伝えた後，「同行しやがれ，その小さな私生児は教区に遺産として残していけ（というのも，彼は子供たちが私生児だと思っていたので，そう口にしたのである）」と言った。ハートフリーは自分を重罪だとする令状があると聞いてとても驚いたが，フレンドリーが顔に出したほどの不安は示さなかった。ハートフリーの長女は，巡査が父親をつかむのを見るとすぐに遊ぶのを止めて，父親のところに駆けつけると，わっと泣き出し，「かわいそうなパパにひどいことをしちゃダメ」と大声で叫んだ。他の悪党の一人が，ハートフリーの膝から次女を荒っぽく引き離そうとしたが，ハートフリーがさっと立ち上がり，その男の襟首をつかみ，脳みそと言えるものをその男が持っていたら一撃で無くなってしまったかもしれないくらい激しくその男の頭を壁にたたきつけた。[19]

子供は父親を守ろうとし，父親は子供への暴力を許さず，毅然として戦った。ハートフリーは相手に殺しかねないほどの攻撃を加えたのである。

アダムズについて見てみる。彼は家の外では尊敬されており，また愛されている。

村人たちはこの善人（アダムズ）の助言に従った。実際のところ，彼の言葉は彼の教区では

法律同然であった。というのも，ひたすら心の中で教区の住民たちのためを思ってきたということを三十五年間変わらぬ態度によって彼らに示してきていたので，彼らは何かあった時には彼に意見を求め，しかも彼の意見に反した行動をとることはまずなかった。[20]（かっこ内筆者）

一方でアダムズが家の中で威厳が無かったことは，冒頭の引用で示したとおりである。彼が身を置いた「ベッドの隅の支柱の上」とはベッドの一番端のことであり，妻が中心部に寝ていたということである。また，彼が寝具をめくる際に「静かに」とあることから，音を立てて妻を起こさないようにとしつけられていることがわかる。アダムズの家では，夫と妻は対等というよりも，妻が上なのである。それは一つにはアダムズが自分の身の回りのことすら満足にできないからである。彼は説教集を出版するためにロンドンに向かいながらも，その説教集を忘れていたのである。

……鞍袋の中の，彼が説教だと勘違いしていたのは三枚のシャツと一足の靴と他の生活必需品であった。これらは，夫は旅行に説教よりもシャツを必要とするだろうと思ったアダムズ夫人が気をつかって入れておいた物だった。[21]

アダムズが旅行する際，必要な物を荷造りするのは妻であった。アダムズは50歳にもかかわらず，こうしたことができないのである。妻にとっては世話を焼かねばならない，手のかかるもう一人の子供のような存在でしかない。また，妻は夫のこうした点をよくわかっていて，うまく助けている。アダムズは，世俗的な面をすべて妻がやってくれるからこそ，体面を崩さずに生活できていられるのである。

アダムズは金銭感覚が無く，浮世離れしている。子供たちの将来の生活について現実的に考えているのは妻である。アダムズの年収は23ポンドなので，財産は残してあげられないから，せめて勤め口を見つけてあげようという妻の子供たちへの愛情が次のように描かれている。

ジョゼフとファニーの恋人同士がドアのところに来たのは，ちょうどアダムズ牧師と妻が長い議論を終えたところであった。実を言うと，この議論は，この若い二人をめぐってのことだったのだ。というのも，アダムズ夫人は，自分の家族の不利益になることは絶対にしないという，あの無分別ではない人々の一人か，あるいはおそらく自分の子供たちに食べ物を与えるためには良心をも欺くような良き母親の一人であった。彼女は長女がスリップスロップの後任になるのを見，次男をブービー夫人の力で消費税収税吏にしたいと長く思っていた。彼女にとって，この二つは，断念することを考えるのは耐えられない期待だったので，夫がファニーのことでブービー夫人の考えにひどく頑なに反対するのを見て，非常に不安になった。彼女は次のように言った「すべての男性にとって，家族のことを第一に考えるのは義務なのです。しかも，その男に妻と六人の子供がいれば，他人のことに出しゃばらずに，自分の家族の面倒をみて，養うことはその男にとっての十分な務めなのです。自分より上の階級の人々への従順な振る舞いを説教でいつもしきりに誉めていた人が，自らの行動で正反対の振る舞いの例を示す悪事を働くことになるのです。……」[22]

アダムズの妻は現実をしっかりと考えている。アダムズは彼女に好きなようにさせてもらっているだけである。アダムズとジョゼフの会話を聞いていた妻がアダムズに意見をする場面を次にあ

げる。

「……妻を愛するのは罪深いことではありません。いや，死ぬほど妻を溺愛することすら罪深いことではないのです」とジョゼフは言う。「いや，そうじゃないんだよ」とアダムズ。「もちろんすべての男性は妻を愛さねばならない。そうしろと命じられているからね。だが，我々は妻を節度と分別を持って愛さねばならないのだよ」とアダムズ。「私は精一杯努力しても罪を犯すと思います。というのも，節度をもって愛するなんてことは私にはできっこありません」とジョゼフ。「お前は愚かで子供みたいなことを言うねぇ」とアダムズは大声で言う。二人の話のこの部分を聞いていたアダムズ夫人が，次のように言う，「なんてことを言うのよ，あなたの方がもっと愚かなことを言っているわ。夫が妻を非常に巧みに愛することができるというような教えを絶対に説教しないでとお願いするわ，あなた。この家にそんな説教を書いたものがあるのを知ったら，必ず燃やしますよ。もしあなたが精一杯私を愛してくれていると信じていなかったら，私は自分からあなたを憎み，軽蔑すべきだったと言えると断言します。まあ，あきれた。本当に素晴らしい教えだわ。妻には，夫に対し，できるだけ多く自分を愛せと強く要求する権利があるのです。そうしない夫は罪深い悪党なのです。ジョゼフさんは妻を愛し，妻を安心させ，妻を大事にするなどと約束しないのですか。私はその全部をつい昨日繰り返したかのように覚えているし，絶対に忘れないって言えるわよ。それに，私はあなたが実践していることを説教していないのはよくわかっています。と言うのも，あなたは私を愛し，大事にしてくれる夫です。それが真実なのですよ。だから，なんであなたはこの若い人の頭にそんな間違ったたわごとを吹き込もうとするのかわからないわ。彼の言うことを聞かないで，できるだけ良い夫になってね，ジョゼフさん，そして全力で妻を愛してもあげてね」。[23)]

ここでアダムズ夫人が口にした「罪深い悪党」（sinful Villain）や「全力で」（with all your Body and Soul）は，彼女がアダムズの領分である宗教面にまで踏み込んだ発言をしていることを示している。信仰についてまで妻が主導権を握っているのである。しかも，彼女はこの発言を，子供がいる前で夫に言ったのである。アダムズは父親としての威厳を損なわれた上に，聖職者としての威厳まで妻に台無しにされたのである。

アダムズの長女は，アダムズに以下のような発言をする。

「それにお父さん，ジョゼフとファニーという他人をあなたの子供たちの口にあるパンを食べるためにここへ連れてくるなんて，すごくひどいわ。あの人たちにうちへ来てからずっとお父さんは食べさせてあげているじゃない。それに，もしかしたらそれどころか，どうあってももう一ヶ月あの人たちを食べさせるかもしれないんじゃない。いくら彼女がきれいだからと言って，お父さんはあの人にお肉を食べさせなければならないの。……私はあんな家なしのあばずれ女に，百万のお金があったとしても，いいえ，彼女が餓死しかかっていようとも，半ペニーもあげるつもりはないわ」[24)]

長女は金銭がいかに自分たちの生活に影響するかをわかっているのである。父親が好きなようにしたら家族が食べるものに困るという不安が現実化するので，それを防ぎたい一心で母親と同種の発言をするのである。それは，親は子供に不安を与えないようにしなくてはならないことを伝えている。

前述の長女の発言を聞いたアダムズの息子のディックは次のように言う。

ディックは「僕はお姉ちゃんよりもあの人（ファニー）の方が好き。だってあの人，お姉ちゃんたちの誰よりもきれいなんだもん」と言った。「あの人が，生意気ね」と長女は言って，ディックの横っ面を殴った。これをアダムズは，その時ジョゼフとファニーと行商人が一緒に戻ってこなければ，おそらく怒っただろう。[25]（かっこ内筆者）

アダムズは，妻が自分の命令に従わなかった時に，妻は夫に服従しなければならないと聖書を引き合いに出して主張した。これに対し妻は，

妻は「教会の外で聖書について議論するのは冒涜ですよ，そうしたことは説教壇で語られるのがたいへんふさわしいのであって，普通の会話の中でそれについて議論するのは不敬ですよ」と反論した。[26]

アダムズは力関係では自分が妻より上であると主張しても，実質的には妻が上なのである。また，彼は妻に従うことを受け入れているのであるが，自分と妻がそうした力関係になっているのをまったくわかっていないのである。

アダムズの妻は，夫への自分の態度が子供たちに与える悪影響を理解していない。母親の，父親への態度を見ている長女は，力関係では父親より母親が上であり，父親を軽んじてよい存在だとみなしている。それゆえアダムズの信仰の拠り所である「慈善」を，彼の目の前で軽んずる発言を何ら臆することなく行ったのである。しかも暴力をふるえば父親が怒るのをわかっているにもかかわらず，その目の前で弟の「横っ面を殴った」のである。家庭内でアダムズには威厳が無いどころか，存在感さえきわめて希薄であることがはっきり示されている。冒頭であげたベッドでのアダムズの位置は，家庭での彼のこうした点を象徴的に表していると言えるのである。

これまでハートフリー，ウィルソン，アダムズの家族を見てきた。ここでもう一家族見てみる。

ジョゼフの育ての母親は，夫が軍務で長く家を留守にしていた間にジプシーに実の子を連れ去られ，代わりにジョゼフが残されていたので，彼を育てた。その後夫が帰宅した際のことを彼女は次のように語る。

……その子はここにいる私たちの娘より二，三歳年上だと思います。……そしてあなたはその子を見た時，年齢のことは全く気にしないで，「元気な男の子だ」と言いました。だから私はあなたがその子の年齢のことにまったく気づかないのを見て，あなたが私と同じくらい彼をかわいがらないといけないので，誰にもこのことを話さなくても良いだろうと思いました。[27]

夫は自分の子供の年齢が合わないことに気がつかなかった。父親の子供への無関心さが明らかにされている。彼は，連れ去られた自分の娘が判った際も「アンドルーズじいさんは，特段の感情も示さずにファニーを祝福し，キスをしたが，朝煙草を吸わなかったので，煙草が欲しいとひどく愚痴った」だけであった。[28] そして，実の子が連れ去られていた件を妻が隠していたことについて妻を咎めなかった。夫が子供のことにまったく関心が無いことを裏付けている。ここからは，親子間に強い絆があるとは思えない。子供から見て父親は心理的に存在していなかったと思われる。

## 2. フィールディングの家

フィールディングの生い立ちを概観する。[29]

1707年4月22日にフィールディングは長男として生まれた。両親の結婚は駆け落ちのようなものであったらしく，フィールディングの祖父母は娘婿にあまり良い印象を抱いてはいなかった。

フィールディングが生まれる直前に彼の母方の祖父は遺言を作成した。この遺言は，義理の息子すなわちフィールディングの父親を排除した内容になっていた。この祖父は1710年に亡くなった。

フィールディングの父親は軍人であった。父親は家を不在にすることが多く，それも長期にわたることがあったとされる。[30]

フィールディングには次々に妹や弟が生まれた。フィールディングの母親が病気になり，1718年には，おばが看病と育児の手伝いのために同居した。しかしフィールディングの母親は彼が11歳になる直前に亡くなった。

フィールディングの父親は，祖父の遺言に反して遺産を使ったために祖母を怒らせた。さらにフィールディングの母親の死後1年もしないうちに再婚したようであり，フィールディングたちの住む家に新しい妻を連れて来た。これ以後父親側の人間と祖母側の人間が対立し始め，家の中には「憎しみ，怨恨，恐怖に染まったぞっとするような雰囲気があった」と考えられている。[31]

1719年にフィールディングはイートン校に入学した。

1721年に祖母はフィールディングの父親を告訴した。裁判は1722年に判決が出て，父親は全面的に負けた。

母親の死から結審までの間，この親族同士の争いは，イートンにいたとは言え，どれほどフィールディングの心を悩ませたであろうか。クロス（Wilbur L. Cross）は，フィールディングは法廷での争いを知っていて，それに悩まされていたに違いないと考えている。[32] バティスティン（Martin C. Battestin）は，フィールディングの幼少時代を「波乱に満ちた」と形容している。[33]

## 3. 機能不全家族

斎藤学は，10歳から12歳を「思春期のプレ段階」とし，12歳から15歳を「思春期前期」としているので，[34] フィールディングは思春期に入ったころに前述の親族同士の揉め事に巻き込まれたと言える。

斎藤は「親としての機能を果たさない親がいる家族のこと」を「機能不全家族」と定義している。[35] 斎藤は「お父さんが仕事依存症で家族を顧みない」家を「家族の機能に不全をきたしているような家」だとも述べている。[36] 信田さよ子は「家族関係がうまく機能しない家」を「機能不全家族」だと述べている。[37] フィールディングの家族で特徴的なのは，母親が亡くなる前から父親は家に不在がちであったことである。

星野仁彦によれば「理想的な父親に必要な条件」とは「子供との温かいふれあい（コミュケーション）（原文ママ）と父親としての権威を兼ね備えて」いることであり，[38] そして父親は「いざという場では威厳を示すことのできる姿勢が必要」であると述べている。[39]

ハートフリーとウィルソンの違いは，ウィルソンの長女の愛犬が，荘園領主の息子に殺された時の言動に示されている。

父親と母親が長女の悲しみを減らそうとしている時，アダムズはこん棒をつかんだ。ジョゼフが止めなかったら荘園領主の息子の後を追って飛び出しただろう。しかしながらジョゼフもアダムズの口までは抑えることができなかった。アダムズは「ごろつき」という言葉にひどく力を込めて口にし，「追剥ぎよりも絞首刑にされるのがふさわしい，自分があいつを懲らしめたかった」と言った。……「あの男の父親は財産が有り過ぎて争うことはできない」とウィルソンは言った。[40]

ウィルソンは荘園領主の息子に向かっていかなかった。懲らしめようとしたアダムズとの対比が重要である。ジョゼフが止めなければ，アダムズは喧嘩を挑んだことであろう。たとえ負けても，アダムズは平気であったろう。また，子供にとっては，勝ち負けよりも親の気持ちが大事なのである。何もしないでいる方が子供の心を傷つけたのではないか。

ウィルソンは，ハートフリーが娘のために暴力をふるったことと異なり，決定的な場面で父親としての役目を果たさなかった。ウィルソンは，親としていざという時に頼りになる存在ではなかった。父親として機能していないのである。

斎藤は「兄弟が生まれてくるというのも喪失になります。これは『母親の膝や乳房の喪失』です。逆に，兄弟がいなくなることも喪失になります」と述べている。[41] フィールディングには次々と妹や弟が生まれた。そして妹のアンはフィールディングが9歳の時に亡くなった。フィールディングは「喪失」感を持ったことであろう。そして母親が亡くなった。斎藤は「親の死」は「喪失」であり，「トラウマになります」と述べている。[42] 星野は「一五歳以前の両親の離別」という「小児期の『喪失体験』は子供の人格形成に大きな影響をおよぼ」すと述べている。[43] 前述のように，母親の死後1年もたたないうちに父親は再婚したようである。妹を亡くし，さらには母親を亡くして，フィールディングら子供たちが不安になっていた時に父親は再婚して自分たちから去ってしまったのである。母親を亡くしたことに加えて父親の再婚という「喪失体験」はフィールディングたちにとって大きな心の傷になったのではないかと思われる。

フィールディングは父親を尊敬していたかもしれない。その父親と敵対する祖母とおばを憎んだかもしれない。ただ，祖母たちの意思に沿わなかった場合は，彼女たちが父親に向けていた怒りを，自分たちに向けるのではないかと考えると，その恐怖ゆえ，彼女たちに従わざるを得なかったであろう。祖母は義理の息子を訴えていることから気性の激しい人だったと思われる。だからその怒りが自分たちへ向けられることをフィールディングたちが怖れるのは当然であると言える。祖母たちの機嫌を損ねないようにしなければならないという不安と緊張感が彼らには絶えずあったであろう。彼女たちの言う通りにすることが，自分たちが生きていく唯一の方法だと考えても不自然ではないと思われる。意に沿わなければ彼女たちは自分たちの保護者でいてくれなくなるわけである。フィールディングたちは自分たちだけではなにもできないような状況にあった。

そしてフィールディングたちは祖母たちの期待に応えて父親と継母を憎めば，祖母たちの機嫌が良くなると知ったことであろう。「子どもは本来親の気持ちをかばうものなので，親の不快感や心の痛みを感じ取ったその子は，親に喜ばれることだけを表現するようになっていく」とアン・W・スミスは述べている。[44] その結果絶えず彼女たちの顔色をうかがっていなければならなかったであろう。祖母たちから向けられる愛情は父親側に付かないという条件のもとに与えられていることにフィールディングも気づいたであろう。祖母たちのこうした態度は愛情ではなく，支配以外の何物でもない。

家の中に祖母側の人間と父親側の人間がいるため，常に緊張をはらんでいたのであろう，子供たちの気の休まる，安全な居場所は無かったのではないかと思われる。「家族の機能の最も大切な部分は『安全な場所』としての機能でしょう。機能不全とは安全感のない家族ともいえます」と信田は述べている。[45] フィールディングの家族は，父親が心理的に不在であることと祖母たちの顔色をうかがいながら暮らさねばならないという点で機能不全家族であったことに加えて，「安全感のない」という点でも機能不全家族であったと言える。フィールディングには安心して心身を預けられる人物が周りにいなかった。彼は非常に孤独だったのではないだろうか。

## おわりに

アダムズ，ウィルソン，ジョゼフの育ての父親はいずれも父親として機能していなかったが，母親がしっかりしているので，外見上は家族としての形をなしていた。アダムズ一家の場合は，妻の能力が勝っているため，家族の中での夫の威厳が低下あるいは無くなっているとも言えるが，妻が，子供たちが不安を感じないようにしているので，問題のある家族としては描かれていない。親は子供に不安を与えないことが家族の条件であり，家庭が安心していられる場所でなければならないとフィールディングは考えていることがわかる。

フィールディングが『ジョゼフ・アンドルーズ』と『ジョナサン・ワイルド』の執筆当時，理想の家族としたのはハートフリーの家族であった。親が子供を守り，かつ将来のことを考え，子供に愛情を注ぐことを家族としての必要な条件とフィールディングは考えたのであろう。これらは母親の死後のフィールディングの育った家庭には無いものであった。彼は，ハートフリー一家のような家族であって欲しいと子供の頃に思ったことを忘れずにいて，その思いを作品で表現したと思われる。

### 注

1）本研究ノートでは，フィールディングと表記した場合は，ヘンリー・フィールディングを指す.

2）テキストにはHenry Fielding, *Joseph Andrews*, ed. Martin C.Battestin, Wesleyan University Press, 1967, を使用した．訳は拙訳であるが，『世界の文学 4 スウィフト　フィールディング』中央公論社，1966年，より朱牟田夏雄訳「ジョウゼフ・アンドルーズ」を参考にさせていただいた.

3）テキストにはHenry Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq. Volume Three*, with an introduction and commentary by Bertrand A. Goldgar, the text edited by Hugh Amory, Clarendon Press · Oxford, 1997, を使用した．この本に「ジョナサン･ワイルド」は収録されているが，本研究ノートでは『ジョナサン・ワイルド』と記す．訳は拙訳であるが，『集英社版　世界文学全集 6 ケベード　ル・サージュ　フィールディング 悪漢小説集　大悪党 悪魔アスモデ 大盗ジョナサン・ワイルド伝』集英社，1979年，より袖山栄真訳「大盗ジョナサン・ワイルド伝」を参考にさせていただいた.

4）Fielding, *Joseph Andrews*, p. 334.

5）Fielding, *Joseph Andrews*, p. 224.

6）Fielding, *Joseph Andrews*, p. 226.

7）Fielding, *Joseph Andrews*, p. 227.

8）Fielding, *Joseph Andrews*, p. 222.

9）Fielding, *Joseph Andrews*, p. 229.

10）Henry Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq. Volume Three*, p. 195. このページにある「愛の家族」（*the Family of Love*）の注は，“Fielding uses the same phrase in *The Author's Farce* (I. vii), the *Champion* (26 Feb. 1740), and *TJ*, p. 765. The phrase originally alluded to a sect of that name which began

in Holland and flourished in England in the 16th and 17th centuries; 'they held that religion consisted chiefly in the exercise of love, and that absolute obedience was due to all established governments, however tyrannical' (*OED*)"となっており，ここでどういう意味で使われているかについての判断は示されていない．*the Family of Love*について，*Oxford English Dictionary*, second edition, on CD-ROM Version 4.0. 2009.には "family of love"で "a sect which originated in Holland, and gained many adherents in England in the 16th and 17th c.; they held that religion consisted chiefly in the exercise of love, and that absolute obedience was due to all established governments, however tyrannical"と記されている．

ロックウッドは『オーサーズ・ファース』（*The Author's Farce, 1730*）におけるこの言葉の使用に関して「この言葉はここではなんら宗派的な意味合いは無いと思われる」（Henry Fielding, *Plays Volume I, 1728-1731*, edited by Thomas Lockwood, Clarendon Press · Oxford, 2004, p. 238n）と述べている．また，コウリーは「この言葉は歴史的な特別な意味合いを持っているが，フィールディングはそれを知らなかったか気にしていなかったようである」，「明確な軽蔑的な意味を持たせずに『オーサーズ・ファース』，『ジョナサン・ワイルド』および『トム・ジョーンズ』で使っている」と述べている（Henry Fielding, *Contributions to The Champion and Related Writings*, edited by W.B. Coley, Clarendon Press · Oxford, 2003, p. 202）．筆者もコウリーと同意見である．なお，『トム・ジョーンズ』（Henry Fielding, *The History of TOM JONES A FOUNDLING*, with an introduction and commentary by Martin C. Battestin, the text edited by Fredson Bowers, Wesleyan University Press, 1975）の765ページにある注は，"Cf. Mrs. Moneywood, the landlady in *The Author's Farce* (1730), who tells Luckless that before he came, 'We were the Family of Love' (I. vi〔*sic*〕). In *Jonathan Wild* (IV. xvi) Fielding describes the Heartfrees this way. Originally, the phrase was another name for the Familists, a religious sect founded in the sixteenth century by Henrick Niclaes."となっており，ここでどういう意味で使われているかについての判断は示されていない．

11）Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq. Volume Three*, p. 137.
12）Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq. Volume Three*, p. 137.
13）Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq. Volume Three*, pp. 70-71.
14）Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq. Volume Three*, p. 79.
15）Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq. Volume Three*, p. 51.
16）Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq. Volume Three*, p. 92.
17）Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq. Volume Three*, p. 75.
18）Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq. Volume Three*, p. 148.
19）Fielding, *Miscellanies by Henry Fielding, Esq. Volume Three*, pp. 126-127.
20）Fielding, *Joseph Andrews*, pp. 48-49.
21）Fielding, *Joseph Andrews*, pp. 92-93.
22）Fielding, *Joseph Andrews*, p. 306.
23）Fielding, *Joseph Andrews*, pp. 310-311.
24）Fielding, *Joseph Andrews*, pp. 322-323.
25）Fielding, *Joseph Andrews*, p. 323.
26）Fielding, *Joseph Andrews*, p. 323.
27）Fielding, *Joseph Andrews*, p. 337.
28）Fielding, *Joseph Andrews*, pp. 339-340.
29）フィールディングの生い立ちについては拙著『ヘンリー・フィールディング伝』春風社，2010年，をもとにしている．
30）Battestin, Martin C. with Battestin, Ruthe R., *Henry Fielding: A Life*, Routledge 1993. pp. 16-18.
31）Battestin, *Henry Fielding: A Life*, p. 31.
32）Cross, Wilbur L., *THE HISTORY OF HENRY FIELDING*, New Haven Yale University Press. 1918. p. 35.
33）Battestin, *Henry Fielding: A Life*, p. 52.
34）斎藤　学『「家族」という名の孤独』（講談社＋$\alpha$文庫）講談社，2000年，138ページ．
35）斎藤　学『アダルト・チルドレンと家族――心のなかの子どもを癒す』学陽書房，1996年，81ページ（以

下，斎藤『アダルト・チルドレンと家族』と略す）.

36）斎藤『「家族」という名の孤独』125ページ.

37）信田さよ子『「アダルト・チルドレン」完全理解』三五館，1996年，54ページ.

38）星野仁彦『機能不全家族（アダルト・チルドレン）——心が折れそうな人たちへ……』アートヴィレッジ, 2007年, 279ページ（以下，星野『機能不全家族（アダルト・チルドレン）』と略す）.

39）星野『機能不全家族（アダルト・チルドレン）』85ページ.

40）Fielding, *Joseph Andrews*, p. 228.

41）斎藤『アダルト・チルドレンと家族』195ページ.

42）斎藤『アダルト・チルドレンと家族』193ページ.

43）星野『機能不全家族（アダルト・チルドレン）』74ページ.

44）アン・W・スミス（斎藤　学監訳・和歌山友子訳）『アダルト・チルドレンの子どもたち』誠信書房, 2005年, 20–21ページ.

45）信田『「アダルト・チルドレン」完全理解』55ページ.

本研究ノートは2015年3月14日同志社大学で行われた「十八世紀英文学研究会」の例会における口頭発表に加筆・修正をしたものである.